

# 現代日本語の原点としての明治期翻訳文学

## 若松賤子訳『小公子』を中心に

クロス尚美（姫路獨協大学）

n. cross@gm.himeji-du.ac.jp

### 【要約】

文学運動としての言文一致運動が明治20年代後半にはその勢いを失う一方で、婦人や子供読者を対象とした女性雑誌では、他に先駆けて「口語化」が進んだ。中でも高い発行部数を維持した『女学雑誌』を活動の拠点としていたのが、英語を第二の母語とする翻訳家若松賤子である。特異な言語環境に育った若松賤子の文体には、英語の影響がみられ、その語彙表現においては和語系のオノマトペの多用など、現代日本語に共通する部分が多い。本研究は「若松賤子の文体が現代日本語の原点である」という仮説を、様々な視点から検証を試みるものである。

### 1. はじめに

明治20年代前半の「言文一致運動」は、写実主義から小説のための言語表現を求めておこった文学運動であり、日常生活に密接した現代日本語の基礎となるものではなかった。近代化を急ぐ日本は、上意下達のための共通語を模索しており、明治5年の学制により教育が民主化された。国家政策としての「言文一致」の必要性は、明治維新前から考えられてきたものである。そのためには、初等教育の普及とともに、誰しもが理解できる書きことばの普及が必要不可欠であった（飛田 2004）。そして明治33年には、言文一致体の初等教科書、『尋常国語読本』が出版されている（海後, 仲 1961）。一方、文学運動としての言文一致運動は、明治20年代後半には失速し、ナショナリズムの台頭とともに擬古典主義、浪漫主義文学があらわれる。明治後半から大正期にかけての出版物を

みると、口語文（言文一致体の文章）が文学雑誌の中で主流となるのは大正期にはいつからである。文芸雑誌『文學界』は明治26年に『女学雑誌』の文芸部門が独立したもので、星野天知・北村透谷・島崎藤村らが同人として、明治中期における浪漫主義運動の中心となった。樋口一葉「たけくらべ」、北村透谷「内部生命論」などが『文學界』に発表されている。『文學界』は明治31年に廃

刊しているが、共通した作家の作品を掲載した『文藝倶楽部』、さらに慶應義塾大学文学部が中心となった『三田文学』を総合し、明治27-28年、明治42年、そして大正6年に掲載された作品の中の、文語・口語比率を求め、表1にまとめる。尚、統計年を「明治27-28年」「明治42年」「大正6年」とし

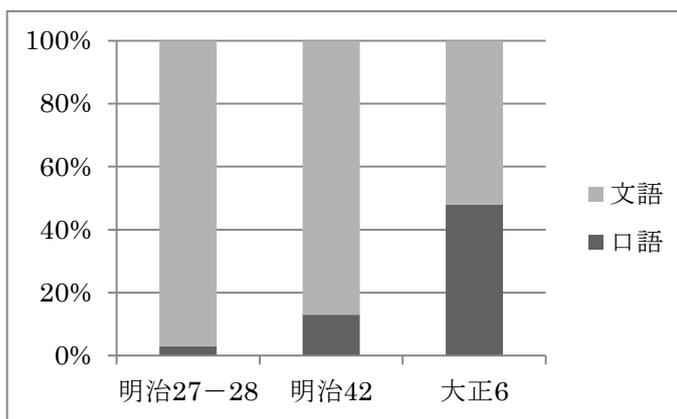


図1 文芸誌に掲載された作品中の文語・口語比率  
(資料：筆者が復刻版をもとに算出)

たのは、後で述べる図2と3の資料年に合わせるためである。また、『文學界』に続く文芸誌として『文藝倶楽部』と『三田文学』を選んだのは、比較的容易に該年度の資料にアクセスできたからである。

文芸雑誌では大正期に入ってから、文語による作品が過半数を占めているのに対し、女性（あるいは母を通して子ども）を対象とした女性雑誌の場合は、文体の口語化が急激に進んだ。国立国語研究所が2006年に公開した、明治後期～大正期の女性雑誌3種から40冊を抽出した全文コーパスである「近代女性雑誌コーパス」を用いて、

女性雑誌における文語・口語比率の変化状況をまとめたものが図2である。明治20年代後半では1割以下であったのに、明治後期には、すでに9割近くの作品が口語体で発表されていることが分かる。

それでは、総合雑誌の場合はどうか。明治28年に創刊された総合雑誌『太陽』における文語・口語比率を図3に示す。『太陽』の創刊号は28.5万部発行され、その後10年以上にわたり毎号平均10万部弱の発行部数であったことから、上野（2007）

は非常に影響力の強い雑誌であったとしている。口語体の普及率は、女性誌のそれほどではないが、文芸誌よりも早い時期に口語化が進んでいるといえよう。

文学運動としての言文一致運動が、広く一般に言文一致体を広めたのではないのなら、明治政府の目指した共通語としての口語体の普及のために、口語体の文章を書き、次世代に強く影響を与えたのは誰だったのか。本研究では、それが若松賤子であったという仮説のもと、様々な視点からの検証活動を続けており、本稿ではその経過と展望とを紹介する。

## 2. なぜ若松賤子なのか

### 2.1 「もうひとつの言文一致運動の担い手」としての若松賤子

文学史では、言文一致運動の代表的作家として、二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉らに加え、若松賤子の名が挙げられることが多い。しかし若松賤子の言文一致体は、むしろ文学運動としてではなく、別の次元で、大きく現代日本語の成立に関わっているのではないだろうか。そう考える理由が三つある。

第一に、若松賤子の活動の中心が、『女学雑誌』であったことである。『女学雑誌』は、若松賤子の

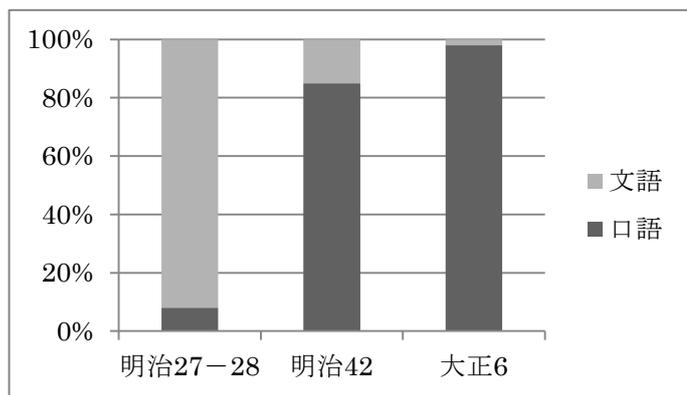


図2 近代女性雑誌コーパスの文語・口語比率

資料：田中 2006.7

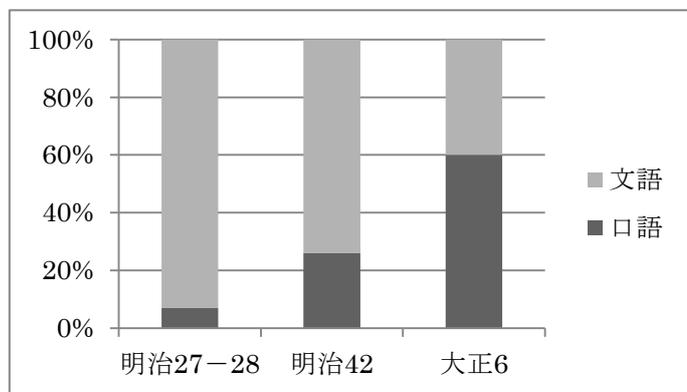


図3 太陽コーパスの中の文語:口語比率

(資料：田中 2004:79)

夫である巖本善治によって明治18年に創刊された女性啓蒙雑誌であり、社説、評論、小説などを掲載した。『女学雑誌』を筆頭に明治から大正時代にかけて出版された数々の女性誌において、口語体（言文一致体）による作品が急激に増加したことは、女性雑誌が言葉の近代化を牽引したとことを示唆しているのではないだろうか。小山（2005）は『女学雑誌』の総発行部数について具体的な数字はあげていないが、「明治18年から37年までに548冊刊行し、全国に増え続ける女学生を購読層に多大な影響を与えた」としている。また、相馬（1977:95）はその自伝的エッセイ『黙移』で、当時の女学生たちが一冊の『女学雑誌』を待ち焦がれ、東京から地方の女学生らにと読み継がれていく様子を語っている。発行部数の数十倍もの読者がいたとしても不思議はない。

第三は、男性でも英語教育を受ける機会が限られていた明治初期にあつて、孤児となった若松賤子が英語教育を受け、英文学の翻訳者として成功をおさめたことである。若松賤子の作品として最もよく知られているのが、バーネットの“Little Lord Fauntleroy”の翻訳、『小公子』である。『小公子』は明治23年から24年にかけて『女学雑誌』に連載された。その後、前篇後編の二部作として出版されたが、当時の児童文学の分野では異例の売れ行きで、二年間で4回再版されたという（秋山 1995）。明治維新から23、4年で、異国の物語がそれほどまでの好評を博したのである。読者の若い女性が成長し、母となり、母から子へと読み継がれていくというプロセスを考慮するなら、それがのちに文豪と呼ばれる作家の作品であったにせよ、言語文化の次世代への影響力と言う点からすれば、『小公子』には遠く及ばないのではないだろうか。

明治初期に高度な英語教育を受けた女性は数少ない。下級武士の娘であり、その父とも幼くして生別した若松賤子の言語環境について、さらに検証を進める。

## 2.2 若松賤子の言語背景

若松賤子は、明治初期にあつて、高度の英語教育を受けた特異な人物であった。言文一致体の登場までは、書きことばは漢文あるいは漢文訓読体が主流であり、当時の知識人たちは英語教育の前に漢籍を学んだ。ところが若松賤子が学んだ女学校においては、漢文と古典は、洋裁、和裁、手芸と同等に位置づけられた科目であったこと（フェリス女学院（編）1975、キリスト教学校教育同盟 1977：155-157）は、若松賤子の言語背景を考える上で興味深い。

幼くして母を亡くし、養母との折り合いが悪く、宣教師メアリー・キダーのもとでフェリス・セミナリーの一期生となった若松賤子（尾崎 2007）にとって、英語は第二の「母語」であったといえるのではないだろうか。若松賤子の幼少時代は、貧困と戦火を逃れて流浪の日々であり（尾崎 2007）、言語環境としては非常に貧しいものであった。正規に就学したのが8歳と、同年代の他の作家たちに比べて遅かったこと、日本の文化風土に溶け込んだ女子教育を目指していたとはいえ、アメリカ人宣教師によって創立されたミッションスクールに学んだことなど、若松賤子の受けた教育は特殊である。キリスト教信者として、また教育者として、子供や婦人向けの短編を多く書き、英文学の翻訳を手がけた若松賤子の、平易な語彙表現を用いた文体は、漢籍や古典よりも強く英語に影響されていたとしても不思議はない。

## 3. 若松賤子の文体の検証

若松賤子の文体が、現代日本語の原点であることの検証には、様々な方法が考えられる。本稿では、

これまで筆者が試みてきた、あるいは今後取り組む予定の検証方法を三つに分け、経過報告する。検証対象としたのは、若松賤子訳『小公子』と、同時代の他の作家の作品、また同じバーネットの Little Lord Fauntleroy の現代訳である坂崎麻子訳（1987）である。検証作業には、できるかぎりデジタルコーパス化されたもの、あるいは筆者が OCR 処理してデジタル化したものを使用する。

### 3.1 文体比較 — 若松賤子の文体にみる英語の影響

句読点の使用、区切りの単位としての「文」の概念は、文語にはみられない。これらは、英文翻訳を通して日本語に導入されたのではないだろうか。明治期に創刊された雑誌『文學界』と『女学雑誌』の復刻版をみると、現代のような句読点の使用はまだ確立されておらず、同じ作者の、同じ作品の中でも、特に句点の使用には一貫性がない。句点の代わりに読点が使われていたり、読点だけで句点がなかったりする。作品中の句点の数を数えることで、作者の「文」の意識がみえてくるのではないだろうか。

『小公子』の場合、原文のセンテンスと、訳文の文が一对一で対応している部分が多いが、これは若松賤子の受けた英語教育が大きく影響していると考えられる。漢籍や古典の決まりごとにしぼられることなく、英語の「センテンス」の概念を、そのまま日本語に移しているのではないだろうか。

また、英語では不可欠であるが、日本語では省略されやすい「主語」は、若松賤子訳の『小公子』ではそのまま残されていることが多い。ここでいう「主語」とは、言語学でいう厳密なものではなく、学校文法でいう文の構成要素としての「主語と述語」のそれであり、通常「が」または「は」を伴うと考える。クロス(2013)では、「青空文庫」のデータを用い、『小公子』と、二葉亭四迷の『あいびき』、森鷗外の『舞姫』、樋口一葉の『たけくらべ』に出現する助詞の「が」と「は」を比較した。また、句点で区切られる文の総数、文字数、一文の中の平均文字数を表1に示す。

表1 「が」と「は」の出現頻度と一文の中の文字数比較

	「が」	「は」	文数	「が」「は」 出現頻度	文字数	文字数／文
小公子 (明 23)	321	559	2,096	42.0%	142,718	68.1
あいびき (明 21)	14	6	164	12.2%	9,179	56.0
舞姫 (明 23)	0	63	355	17.7%	15,441	43.5
たけくらべ (明 28)	0	2	67	3.0%	29,886	446.1

表1から明らかのように、英文学の翻訳である若松賤子の『小公子』では、同じ明治20年代の代表的な文学作品と比べて「が」と「は」の使用頻度が高い。同じ翻訳小説であり、言文一致体ある二葉亭四迷の『あいびき』でも、ひとつの文の中に「が」または「は」が使用される率は、『小公子』の42%に比べて12.2%とかなり低い。ひとつの文を構成する文字の数の比較では、『小公子』『あいびき』『舞

姫』の順で少なくなる。一方、雅文体で書かれた『たけくらべ』は、一段落が一つの文をなして、一文の平均文字数は446.1字であった。文字数の比較では、漢字、特に熟語の使用率を考慮する必要がある。仮名表記される語彙表現、漢字表記される語彙表現の区別も必要である。例えば、和語起源のオノマトペは、仮名表記されることが多く、オノマトペが多用されれば、文字数も増える一因となる。

### 3.2 語彙表現 — オノマトペから

擬音語、擬態語、擬声語を含むオノマトペは、古典文学から現代まで通じるものであるが、明治前期では和語系のオノマトペは俗語とされ、文学作品に現れる頻度は低かった（中里 2001）。そこで、クロス（2014 発表予定）は同じ原作を翻訳した若松賤子の『小公子』と、原作の初版からほぼ100年を経て出版された坂崎麻子訳の『小公子』で使われるオノマトペとの比較調査を行った。異なり語数、延べ語数とも、坂崎訳が若松訳を上回る。うち、「きっと、じっと、びっくり、にこにこ」などは両方に高い頻度で現れる例である。表2に示す通り、クロス（2014 発表予定）で扱った9つの形態分類では、若松訳と坂崎訳で同様の分布が見られた。両訳とも語基反復型がもっとも多く、次に第二拍に促音をもち、「り」で終わる〇っ〇り型、三番目に第二拍に促音があり、「と」を伴って現れる〇っ（と）型が多い。

表2 若松訳・坂崎訳に見られるオノマトペの形態分類

異なり語数	若松訳	坂崎訳	延べ語数	若松訳	坂崎訳
語基反復型	58	67	語基反復型	108	124
交替型	1	2	交替型	1	4
〇っ〇り型	21	20	〇っ〇り型	85	142
〇ん〇り型	8	3	〇ん〇り型	16	3
〇っ（と）型	16	19	〇っ（と）型	95	81
〇ん（と）型	5	14	〇ん（と）型	13	34
〇〇り（と）型	2	14	〇〇り（と）型	3	23
複合語	6	2	複合語	8	2
その他特殊型	5	9	その他特殊型	10	16
合計	122	150	合計	339	429

若松訳に見られるオノマトペ形態分布と坂崎訳のそれとの間には、異なり語数ベース、延べ語数ベースでも、それぞれ0.9571、0.918738という強い正の相関関係を示唆する係数がみられる。若松訳と坂崎訳との間に真の相関関係であるならば、若松訳の形態分布が坂崎訳のその原型となっていないとはならない。本研究のテーマはその検証であり、これまでの検証結果からはそのような因果関係は導き出せない。そこでクロス（2014 発表予定）は、この相関関係を「疑似相関」としている。

一方、Kizu and Cross（2013）では、英日翻訳時に起こるクラスシフト（品詞転換）に着目し、英語の語彙が日本語のオノマトペに訳される場合の規則性について報告している。この規則性が同じ原作“Little Lord Fauntleroy”の翻訳であることから生じたものなのか、他の作品ペアでも同じ傾向がみられるのかについては、今後の課題とする。

### 3.3 ステレオタイプと役割語

若松賤子が『小公子』を発表したのは、その原作 Little Lord Fauntleroy が出版された 1886 年から 4 年後の 1890 年、つまり日本が開国してわずか 23 年後のことである。その短期間に、若松賤子は自身の経験を通して英米文化を理解し、『小公子』を翻訳したのであろう。Lippmann (1922) の定義によれば、世論はマス・メディアに強く影響を受ける。例えば物語を通して、異国文化に触れ、そのステレオタイプを形成するのだとすれば、『小公子』を通して、読者は異国の文化のイメージを形成していたのではないだろうか。当時の読者が描いたイメージは、どの程度現代の人々のもつ『小公子』の世界と共通するのであろうか。

ステレオタイプの延長線上に日本語特有の「役割語」(金水 2011) があるとするならば、「役割語」がいつどのように形成され、現在にいたっているかの検証も必要となる。書きことばの中の口語表現が過渡期にある中、若松訳ではまだ「架空の役割語」は見られない。原文にあるイギリス英語とアメリカ英語の違いを表現するために、様々な工夫をしているが、英米に対応するような二つの架空の日本語文化の世界を創り出すにはいたっていない。これは坂崎訳でも同様である。どちらにも共通しているのは、女性らしさ、育ちのよい男の子らしさ、懇篤な弁護士らしさ、高慢な伯爵らしさ、下町の靴磨きの青年らしさなど、「らしさ」を感じさせる口語表現のステレオタイプである。若松訳の『小公子』と、1987 年の坂崎麻子訳の『小公子』とにおけるステレオタイプと「役割語」のさらなる比較・対照分析を、次の課題としたい。

## 4. まとめと今後の課題

本稿は、若松賤子の文体と現代日本語とのかかわりを探り、若松賤子の作品に代表される明治期の英文学の翻訳が、現代日本語の原点であるとの仮説の検証の進捗状況を報告している。これまでの検証結果、また現在進行中の検証活動は、若松賤子の文体が明治半ばの他の作家の作品と比較しても、格段と現代日本語に近い性質を持っていることを示唆している。

これまでの検証活動では、若松賤子の『小公子』を、その原文であるバーネットの“Little Lord Fauntleroy”と、明治期の他の作家の作品と比較することで、センテンスの確立、句読点の使用の確立、主部と述部の呼応など、より英語に近い文体の特徴が明らかになった。これは、若松賤子の特異な言語環境と教育に強く影響されているものと考えられる。

若松賤子の文体と現代日本語のそれとの強い関連性を示すものとして、オノマトペの使われ方における坂崎麻子訳との対照検証も行った。坂崎麻子訳の方がオノマトペ語彙の出現頻度が高いのは、現代と比べて明治 20 年代には形式にとらわれない和語オノマトペが日常語彙として定着していなかったことが考えられる。しかしながら、疑似相関ではあるが、形態的分類では若松訳と坂崎訳の間に近似性が確認できた。さらに、出現頻度の高いオノマトペが、源氏物語などの古典文学にもみられること、そしてそれらが現代でも日本語基本オノマトペ語彙に含まれる(三上 2006) ことから、オノマトペが若松訳『小公子』を境にし、それ以前のスタイリッシュな語彙表現と、現代日本語に共通してみられる語彙表現とに分かれるのではないかと思われる。

現在進行中の研究課題として、まずステレオタイプと「役割語」による分析がある。さらに、外来語の扱いについても、今後の課題としたい。

## 参考文献

- Kizu Mika and Cross Naomi. (2013) 'Translating into Japanese Mimetics: A case study of Shōkōshi (Little Lord Fauntleroy) in the Meiji era and the present time' presented in the Grammar of Mimetics Workshop, SOAS University of London on 10 May 2013
- Lippmann, W. (1922) "Public Opinion" New York:Harcourt Brace
- 秋山勇造 (1995)「明治期の翻訳者(3) 若松賤子」『人文研究』123号、25-62 神奈川大学
- 上野隆生 (2007)「研究プロジェクト: 日本近代化の問題点—明治国家形成期の明と暗 雑誌『太陽』の一側面について」『和光大学総合文化研究所年報』252-285 和光大学
- 尾崎るみ (2007)『若松賤子: 黎明期を駆け抜けた女性』港の人
- 海後宗臣, 仲新 (1961)「尋常国語読本」『日本教科書大系』(1961) 海後宗臣, 仲新(編)第4巻
- キリスト教学校教育同盟 (1977)『日本キリスト教教育史: 人物篇』創文社
- 金水敏 (2011)『役割語研究の展開』くろしお出版
- クロス尚美 (2013)「言文一致運動の二層性と現代日本語—若松賤子の役割—」『ことばの研究』1号、1-25 姫路獨協大学
- クロス尚美 (2014 予定)「言文一致体と現代日本語との関係性 翻訳『小公子』にみられるオノマトペ表現の比較を通して」『姫路獨協大学外国語学部紀要』27
- 小山彰子 (2005)「語り」からみる明治期の女子教育—『名媛の學生時代』読売新聞社刊行を手がかりに—『三田社会学』第10号 96-111
- 坂崎麻子訳 (2006)『小公子』偕成社  
『女学雑誌』復刻版 (1984) 臨川書店
- 相馬黒光 (1977)『黙移—新装版—』法政大学出版部
- 田中牧朗 (2004)「雑誌『太陽』創刊年における口語文—敬体を中心に」『国語論究』11号、78-107
- 田中牧朗 (2006)「『近代女性雑誌コーパス』の概要」『国立国語研究所』8号、55-62
- 中里理子 (2001)「明治後期の和語系・漢語系オノマトペ」『上越教育大学紀要』第20巻 第2号、562-574
- 飛田良文 (2004)「言文一致教育の視点」飛田良文(編)『国語論究 (11) —言文一致運動—』明治書院、pp. 1-20  
『文學界』復刻版 (1976) 冬至書房新社  
『文藝俱樂部』明治編 DVD 復刻版 (2005) 日本近代文学館  
『文藝俱樂部』大正6年(1917) 博文館
- フェリス女学院(編) (2007)『キダー公式書簡集』
- 三上京子 (2006)「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU 日本語教育研究』3, 49-63  
『三田文學』大正6年(1917) 三田文學會

## デジタル・アーカイブ

- Burnett Hodgson Frances (日付不明) Little Lord Fauntleroy. 参照日: 2013年10月27日,  
参照先: Project Gutenberg: <http://www.gutenberg.org/ebooks/479>
- バアネット作 若松賤子訳. (日付不明) Internet Archive Wayback Machine 参照日: 2013年10月

27日, 参照先: タイトル: 小公子 (Little Lord Fauntleroy,  
1886): <http://web.archive.org/web/20040818094547/http://www.sm.rim.or.jp/~osawa/AGG/11f/index.html>

バルネット著 若松志づ子訳. (日付不明) 小公子 (明治30年出版、博文館発行) 参照日: 2013年10月27日, 参照先: 近代デジタルライブラリー:

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168374>

樋口一葉『たけくらべ』(2011) 参照日: 2013年10月27日、参照先: 青空文庫:

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000064/card389.html>

二葉亭四迷訳『あいびき』(2006) 参照日: 2013年10月27日、参照先: 青空文庫:

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000005/card5.html>

森鷗外『舞姫』(2004) 参照日: 2013年10月27日、参照先: 青空文庫:

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/card682.html>

若松賤子訳『小公子』(日付不明) 底本『女学雑誌』227~237号(1890年8月23日~11月1日)・266~299号(1891年5月23日~1892年1月9日) 参照日: 2013年10月27日, 参照先: 「小公子の部屋」<http://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/11f.htm#1>